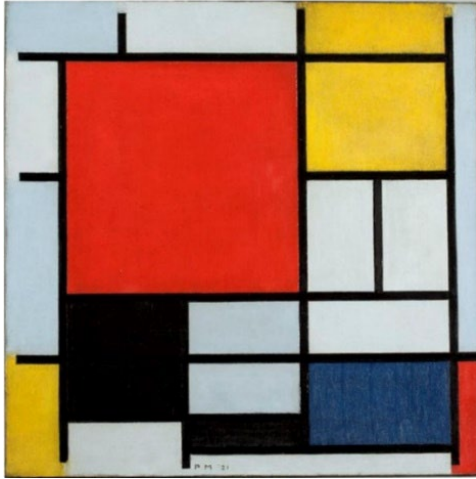


# 樹木と絵画の交差点

## 第6回 ～モンドリアンとリンゴ～

「赤、黄、青と黒のコンポジション」(下図)は、現代の建築、ファッション、工業デザインの世界にも影響を与えた、近代抽象絵画の金字塔ともいえる作品です。皆さんもこのデザイン、分割線で区切られた原色の色面をどこかで目にしたことがあるのではないのでしょうか。作者はピート・モンドリアン(1872-1944)です。しかしこの先鋭的な抽象画も、元を辿れば写実を出発点にして生み出されたスタイルなのです。



モンドリアンはもともとオランダの美術学校で伝統的な美術教育を受け、初期は樹木や風景を写實的に描いていました。そして美術学校を卒業したあとパリへ出て、ピカソとブラックが唱えたキュビズムの洗礼を受けて抽象への志向を強めます。晩年には第二次世界大戦を逃れた先のニューヨークで近代的な都市のエネルギーや摩天楼に触発されて、後にモンドリアンの代名詞となるコンポジションの連作を描きました。

モンドリアンが具象画から抽象画に移行していく過程で、リンゴの木のモチーフは重要な役割を果たしています。

### ピート・モンドリアン(1872-1944)

「赤、黄、青と黒のコンポジション」(1921年) デン・ハーグ市立美術館蔵  
中期以降の線やかたちの要素を切詰めたストイックな作品は「冷たい抽象」と呼ばれる。  
「私の知る限りでは、絵画を額縁から取り出した最初の間人こそ、私であった」と語った。

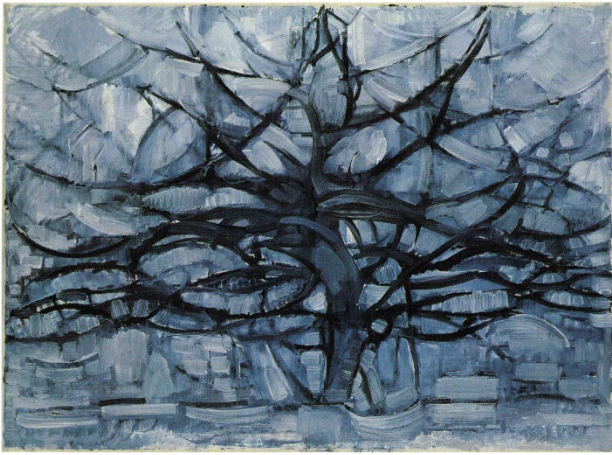
## リンゴの木から抽象への跳躍

モンドリアンはアムステルダム国立美術学校で学んだあと、30代半ばのころオランダ北海沿岸のゼーラント地方を拠点に制作を始めます。この時期のリンゴの木をモチーフにした連作をきっかけにして、モンドリアンの孤高の制作の試みが始まります。



赤い樹(1908年)  
デン・ハーグ市立美術館蔵

「リンゴの木」の連作初期の作品。  
神秘的な木の生命感と、同じオランダ出身の画家、ゴッホにも通じる強烈な色彩と点描のタッチが印象的です。  
枝や樹冠の量感を感じさせる描写に対して、根元や地面の部分は点描で平面的に描いています。基本的には対象を忠実に再現していますが、赤と青の激しい色彩の対比は、後のコンポジション連作で見せる原色へのこだわりを思わせます。



灰色の木 (1912年)

デン・ハーグ市立美術館蔵



花咲くリンゴの木 (1912年)

デン・ハーグ市立美術館蔵

前作「赤い樹」と同様、神秘的な大気を感じさせながらも、より抽象化している「リンゴの木」。左右作品とも同じ樹木を想定して描いているのが分かります。手前や奥に伸びるリンゴの枝を単純な線の要素に還元して、幹や枝を取り巻く空間も同時に暗示しています。この頃パリに長く滞在したモンドリアンは、ピカソらが唱えた“分析的キュビズム”の影響を受け、急激に抽象化を進めました。

“キュビズム”は、ポール・セザンヌの作品にインスピレーションを受けた画家たちがおこした現代美術の大きな動向で、「あらゆる対象を平面的に、幾何学的図形に還元して描く」という理論をもとに追求された美術運動です。モンドリアンがリンゴの木をモチーフとして選んだのは、リンゴを多く描き「リンゴの画家」と呼ばれたセザンヌへの敬意があったからかもしれません。



木のコンポジション (1912-3年)

デン・ハーグ市立美術館蔵



黒と白のコンポジション (埠頭と大洋) (1915年)

クレラー＝ミュラー国立美術館蔵

さらに抽象化が進められた作品です。この頃から対象のイメージが消えはじめ、水平線と垂直線が強調され始めます。

モンドリアンはリンゴの木の連作のあと、「純粋なリアリティ」を持つ、もっと完全に抽象的な芸術が必要であると考えました。そしてキャンバスを一つの完成された平面として考え、キャンバスを額縁から取り外しました。

抽象を純粋な芸術にするため、キュビズムのさらに先を目指し、探求をはじめた転機作品です。



## ヨーロッパとリンゴの深い縁

リンゴ (*Malus pumila*) はバラ科リンゴ属の落葉高木です。原産はカフカス山脈 (コーカサス地方) のあたりといわれています。涼しい気候を好み、徐々にヨーロッパの北部へと伝えられました。リンゴの品種改良の歴史は長く、古くは古代ローマ時代にリンゴの野生種の最初の改良品種「*Api* (アピ)」の記述が残っています (紀元前 3 世紀ごろ)。以後、現在に至るまで様々な品種改良が行われています。16 世紀頃のイギリスでは、乏しい飲料水の代わりにリンゴサイダーやリンゴ酒を製造してリンゴを重用しました。17 世紀にヨーロッパからアメリカ大陸へ人々が移住した際も、移住先の飲み水の心配をしてリンゴの苗木や種をアメリカに持っていき、開拓した家の周りにリンゴを植樹したと言われ、ヨーロッパの人々とリンゴはとても深い縁で結ばれています。

2000 年から 2004 年にかけて、スイスの民間団体「フルクトゥス」は、絶滅に瀕している果物を自営の農園に植えて保護するプロジェクトを行いました。古代ローマからあるリンゴ品種「*Api Etoile* (アピ・エトワール)」も保護された品種の一つです。「*Api Etoile*」は味が酸っぱく食べるにはあまり適していませんが、星のような五角形で面白いかたちをしています。「フルクトゥス」では希望があれば誰でも保護された樹木の接ぎ木ができ、市民への開放も行いながら希少種の保護活動を進めています。またイギリスのウエストサセックスの栽培家、ピーター・コラット氏は、1 本で 50 品種 (!) のリンゴのなる木を育種して、イギリスのタブロイド紙「デイリーメール」で紹介されました。50 品種の中には、古代ローマからのリンゴ品種「*Api Noir* (アピ・ノワール)」をはじめとした希少種も含まれます。



ニュートンのリンゴ  
撮影場所：小石川植物園 (東京都文京区)

17 世紀イギリスの物理学者、アイザック・ニュートンが家の庭のリンゴの木の実が落ちるのを見て、万有引力の法則を発見したという逸話は有名です。ニュートンの生家にあったそのリンゴの木は、後世に残すために枯れる前に接ぎ木をして子孫をつくりました。そこからとった接ぎ木苗が各国の科学に関係のある場所に分けられて、記念樹として植えられています (「ニュートンのリンゴ」学名 : *Malus domestica* Borkh.cv.*Flower of Kent*、品種 : ケントの花)。日本には 1964 年にイギリスから

接ぎ木苗が寄贈されました。苗は東京都文京区の小石川植物園 (東京大学大学院理学系研究科付属植物園) で育てられ、今でも 4 月から 5 月になると元気に花を咲かせます。

《参考文献》

赤根和生「ピート・モンドリアン その人と芸術」美術出版社 1984年

赤根和生訳編「自然から抽象へ＝モンドリアン論集」美術出版社 1975年

小池洋男編 川上和生絵「リンゴの絵本」農山漁村文化協会 2003年（そだててあそぼう 54）

《参考 URL》

「抽象画家の先駆者モンドリアン～第 5 章～」クレラー＝ミュラー美術館所蔵作品を中心に 印象派を超えて－点描の画家たち  
ゴッホ、スーラからモンドリアンまで 展覧会ホームページ（2022-7-16 現在、ホームページは削除）

「絶滅の危機に立つ珍しい伝統の果物を救え」Swissinfo 記事（2004年 11月 24日）

<https://www.swissinfo.ch/jpn/%E7%B5%B6%E6%BB%85%E3%81%AE%E5%8D%B1%E6%A9%9F%E3%81%AB%E7%AB%8B%E3%81%A4%E7%8F%8D%E3%81%97%E3%81%84%E4%BC%9D%E7%B5%B1%E3%81%AE%E6%9E%9C%E7%89%A9%E3%82%92%E6%95%91%E3%81%88/4216046>（参照 2022-7-16）

“Core blimey! West Sussex gardener has 50 varieties of apple on a single tree including some so rare you can’t buy them in supermarkets” Daily Mail 記事（2014年 9月 8日）

<https://www.dailymail.co.uk/news/article-2747082/Core-blimey-West-Sussex-gardener-50-varieties-apple-single-tree-including-rare-t-buy-supermarkets.html>

（参照 2022-7-16）